函館のまちづくりを考える 第17号

はこまち通信

発行: 函館市地域交流まちづくりセンター http://www.hakomachi.com/

Part 16

工藤市長に聴く 函館のまちづくり

工藤 壽樹 (くどうとしき) 函館市長 現在 61歳

今回は、工藤新市長に、函館のまちづくりに対する思いや、市民活動への期待をお聞きしました。



市長室にて 工藤壽樹市長

丸藤: まちづくりセンターの、産みの親と聞いています。

市長: もともと水道局だった庁舎をなんとか 活用したいなと思い、最初は観光案内所 や市民ギャラリーみたいなものをと考え ていたのを、それだけじゃダメだと、 NPOが集まってまちづくりに参画でき るような拠点にしなくてはと言いました。 ただ、場所的にちょっと偏りがあるので心配していたのですが、多くの人に来ても

らっていますし視察も多いみたいですね。

平成23年6月末 発行

יחון וווו

丸藤: 毎年、視察は50件以上あります。

市長: それは良いことですね。あの建物の独特の雰囲気とマッチして、くつろいでいる学生さんが居たり多様な人が出入りしているから、いいなと思ってます。

丸藤: 市長は以前、市のNPO担当をしていたということですが、函館の市民活動に対してはどのように感じていますか?

市長: 色んな分野の人が活動していて、素晴らしいなと思っています。その人たちが十分に活躍できる土壌はあるので、もっと広めていけたらいいなと思います。昔は行政の腰が引けていた部分が確かにありました。市民の意見をただ聞くというのではなく、市民自体がまちづくりをしていくという風に変えていかなくてはと思いますし、そのための予算もつくりました。

丸藤: 市民参加で、一緒につくっていくこと が大切ですね。 つづく→

特集はこまち対談

市長: 最終的には、地域経営会議というのを考えています。市を何区画かに分け、市民にそれぞれの地区のまちづくりの企画立案をしてもらう。予算要求の権限だとか予算を実行する権限だとかも与えてしまおうと。市は、全体のバランスのことを担う。自分たちが思うようなまちを、共につくりだしていくような仕掛けをつくりたいです。

丸藤: 実現できたら凄いですね。全国的にも あまり例がないと思います。

市長: 本当の意味での市民自治になっていく ことが必要です。全体の自治は議会だけ ど、地区ごとには住民が自主的に進めて いく。

丸藤: 公約にあった、日本一の福祉のまち、 について具体的に教えて下さい。

市長: 私は、日本は経済を反映させながら福 祉国家を目指すべきだと思っています。 それを、函館で行いたい。経済と言って るけど、経済を繁栄させることが目的な のではなくて、ここで生活を安定させ、 所得をきちんと得て税金を納めてもらっ て、それを福祉につぎ込んで充実させて いく。その時の一番わかりやすい合言葉 が、日本一の福祉のまちです。副市長を 退任してから、まちのいろんな人から話 を聞いたんだけど、弱い立場の人、支援 を必要としている人がけっこういて、お 年寄りで孤独な思いをしている人も多い し子育てで悩んでいる人や認知症の介護 をしている家族の皆さんもいる。老老介 護もある。そういった方へ個別に支援し ていくのを、国の制度だけでなく市とし て独自なものを考えながらやっていきた い。将来に不安なく暮らしていけるよう



なまちにしたいと思っています。もちろん、お金がかかるのでいきなり日本一を目指すということは難しいけど、志として持ち、市民みんなで弱い人を支える方向で行きましょうということです。

丸藤: 観光も重要です。

市長: 緊急には、首都圏を徹底的に掘り起こしたい。人口の3分の1が集まってるから、東京の人が動けば広がります。東京に函館の観光物産館を開設する準備を始めています。あと、海外に向けて、ソウルや上海、台北やシンガポール、香港等も含めた大都市で、毎年、函館の観光物産展をやろうと言ってます。

中長期的には、まちを変えることが大事だと思ってます。今まで1泊2日で夜景に頼ってきた観光を2泊3日や3泊4日のまちにする。そのためには、点から線、そして面へと、市全体が観光に堪えるようにしなければなりません。街並みを変える。それも、今までの土木技術的な街づくりではなく、デザイン都市空間を重視したまちづくりで、居るだけで満足してもらえるようなまちに変えなくてはならない。

丸藤: 4年後は新幹線も来ますが、さらに札幌まで通った場合、最終便の時間によっては夜景を観ても一泊しないで移動してしまう可能性も出てきます。

市長: 新幹線が札幌まで行った方が乗る人は多くなります。その時、途中で寄りたいまちをつくらなきゃだめだと言ってます。ガーデンシティーと表現してますが、まちそのものが公園のような、あるいはテーマパークのようなまちをつくりたい。とりわけ西部地区から大門・五稜郭にかけては重要です。

丸藤: 移住者の受入支援も進めたいですね。

市長: 旧北高の上の日吉4丁目に、広い使ってない一帯があります。そこを福祉コミュニティーエリアにしたい。老人施設とか診療所等を入れて、高齢者と福祉関係の人がお互いに住めるようにする。そこを移住者の方も住めるようにできればと思います。

丸藤: 西部地区を元気にするためには?

市長: 古い建物を活かして、デザイン産業を 興したいと思っています。まちの雰囲気 に、芸術やデザインが合っています。新 進の、まだ名前が売れていないような若 い人デザイナー達が入ってきて、まちの 中から新たな発想が生まれてくるように したい。

丸藤: それらを実現するためには、NPOの役割も重要になってきますね。

市長: 私は、新しいまちづくりを始めると言ってます。NPOの人たちもこれに合わせ実行できるよう、自らも高めていくことが必要ですね。

丸藤: 一方で、子供の数や人口が減っています。 市長: これから大変な時代が来ます。あと30 年くらいたったら、函館も人口が半分く

年くらいたったら、函館も人口が半分くらいになってしまうし、2人に1人はお年寄りになる。まちの活力というのは若い人がいないとなくなっていきます。それをなんとかするために雇用を生み、経済をちゃんとしなければならない。決して企業家のための経済第一ではなく、

生活が安定し若者が残れ、住めるために です。

丸藤: そのためにも、若者や女性の積極的な 社会参加が必要ですね。

市長: 変革期や時代を超えて先を目指すときは、若い人が大事です。しかし、今まで若い人や女性の発言の場が少なかった。そこで、若い人と女性のまちづくり会議のための予算を計上しています。まちづくりについて色んな発言をしてもらって、その思いを聞きたい。NPOの人たちも同じです。我々の時代に新しいまちをつくる。みんなで目標を持ちながらやっていきたい。

丸藤: 市民によるまちづくりですね。私達の 責任も大きくなります。

市長: 他都市にもまちづくりセンターはたく さんあるでしょうけど、他に負けないよ うにやってくれていると思います。私は 評価していますよ。何かあれば提案して いただいて、実現できるものは実現して いく。目標を共有し、いいまち、元気な まちにするためにお互い頑張っていきた いと思います。

丸藤:ありがとうございます。



〈聞き手〉 函館市地域交流まちづくりセンターセンター長 丸藤 競